

## 母なる大地 Molly Bloom

永原和夫

*Penelope* is the clou of the book. The first sentence contains 2500 words. There are eight sentences in the episode. It begins and ends with the female word *Yes*. It turns like the huge earthball slowly surely and evenly round and round spinning. Its four cardinal points being the female breasts, arse, womb and cunt expressed by the words *because, bottom* (in all senses, ottom button, bottom of the glass, bottom of the sea, bottom of his heart) *woman, yes*. Though probably more obscene than any preceding episode it seems to me to be perfectly sane full amoral fertilisable untrustworthy engaging shrewd limited prudent indifferent *Weib. Ich bin das Fleisch das stets bejaht.*

—James Joyce<sup>1)</sup>

### (1)

Molly Bloom があらゆる矛盾対立を呑み込んで死と再生をくり返す母なる大地、“*Gea-Tellus, fulfilled, recumbent, big with seed*” (735)<sup>2)</sup> であるという解釈は、“*Penelope*”挿話が始まる前から与えられている。なぜならわれわれが *Ulysses* の最後で彼女の長い独白を読むまで、彼女の口ごもったことばが二、三あるだけで、われわれは Leopold Bloom の情熱とダブリンの男たちの渴望から、否応なしに彼女を性の女神に仕立てしまうのだ。“*Penelope*”を *Ulysses* の

原稿受領日 1983年5月25日

1) From a letter to Frank Budgen, August 16, 1921. *Letters of James Joyce*, ed., Stuart Gilbert (New York: Viking, 1966) 1: 170.

2) テキストは The Modern Library, 1961 を用い、reference は本文中にカッコで示した。

最後を飾るにふさわしい挿話にしているのは、Joyce がきわめて通俗的な女性を材料に “the earth which is prehuman and presumably posthuman”<sup>3)</sup> を創造したすさまじい想像力である。しかし Hugh Kenner の厳しい否定的解釈以降、彼女を現実にも引きもどす試みがくり返しなされている<sup>4)</sup>。Molly 批判はどれも初期の Molly 賛美に共通に見られる感傷的態度を覆すに十分な破壊力を持っているが、あまりにも禁欲的にテキストの表面に固執し、Molly の現実的な面を強調しすぎるきらいがある。“Penelope” が他の挿話との関連性が比較的少なく、単独で扱える独自性をそなえているように見えても、この挿話は全体の一部であり、Molly の象徴性は *Ulysses* の穏やかな展開が最後に要求するものである。

われわれが Leopold Bloom を初めて見る時、彼は薄暗い地下の台所を動きまわって妻のために朝食の準備をし、Molly は寝乱れたベッドでポルノ小説のページを茶に浸した指でめくっている。やがて姦夫 Blazes Boylan の Molly 宛の手紙が届く。服従的な夫は妻のためにローションを求め、新しい小説を与え

3) From a letter to Harriet Shaw Weaver, February 8, 1922. *Letters of James Joyce*, 1: 180.

4) Hugh Kenner, *Dublin's Joyce* (London: Chatto & Windus, 1955), p. 262. 初期の Molly 賛美には次のようなものがある、Stuart Gilbert, *James Joyce's Ulysses: A Study* (London: Faber & Faber, 1930; reprinted New York: Random House, Vintage, 1956); Frank Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses* (Bloomington: Indiana University Press, 1960); Harry Levin, *James Joyce* (Norfolk, Conn.: New Directions, 1941; reprinted, 1961); R. P. Blackmur, “The Jew in Search of a Son.” *Virginia Quarterly Review* 24 (January 1948): 96-116; William York Tindall, *James Joyce: His Way of Interpreting the Modern World* (New York: Scribner's, 1950; reprinted, New York: Grove, 1960). 1960代までの Molly 批評は Phillip Herring, “The Bedsteadfastness of Molly Bloom,” *Modern Fiction Studies* 15 (Spring 1969): 49-62 に要約されているが、次の3点は最近の優れた研究である、David Hayman, “The Empirical Molly,” *Approaches to Ulysses*, ed., Thomas F. Staley & Bernard Benstock (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1970), pp. 103-136; Marilyn French, *The Book as World: James Joyce's Ulysses* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1976); Elaine Unkeless, “The Conventional Molly Bloom,” *Women in Joyce*, ed., Suzette Henke & Elaine Unkeless (Urbana: University of Illinois Press, 1982), pp. 150-168.

るために書店に立寄る。32歳のMolly Bloomは豊満な肉体のスペイン系ユダヤ人で、ダブリンでは名前を忘れられない程度の歌手である。東方の国々にあこがれるBloomはベールでなかば顔を被った妻の黒髪に魅了され、妻のために下着を買おうと思う。彼が渴望と賞賛と畏敬をこめて言及するMollyは、常にその暖かい肉体から立ちのぼる匂いで包まれている。初めて妻が身をまかせた時の興奮をBloomが思い出す時、われわれも彼と一緒に興奮する。

Wildly I lay on her, kissed her; eyes, her lips, her stretched neck, beating, woman's breasts full in her blouse of nun's veiling, fat nipples upright. Hot I tongued her. She kissed me. I was kissed. All yielding she tossed my hair. Kissed, she kissed me.(176)

この異常な興奮は妻が寝取られる苦痛によるものだが、彼はMollyの欲望は抗しがたいと思う。“Ithaca”挿話で彼は妻の不貞を“as natural as any and every natural act of a nature”(733)として“equanimity”をもって受け入れ、“the plump mellow yellow smellow melons of her rump, on each plump melonous hemisphere”(734)に接吻して眠りにつく。

ダブリンの男たちがMollyにいだく印象もBloomの渴望と大差ない。John Henry Mentonは、16年も前に、Bloomが当時求愛中のMollyをMat Dillon家の舞踏会で抱いた記憶を思い出して、“She was a finelooking woman .... And a good armful she was .... She had plenty of game in her then.”と云うと、Ned Lambertは“Has still.”と答える(106)。Madam Bloomを“The vocal muse. Dublin's prime favourite.”とO'Madden Burkeがもちあげると、Lenehanは“O, for a fresh of breath air! I caught a cold in the park. The gate was open.”(135)と猥褻な暗示をこめて両義的な返事をする。彼はグレンクリーの慈善晩餐会の帰途、馬車の中でMollyの“ample curves”を弄んだことがある(234-235)。“The wife has a fine voice. Or had. What?”とLidwellがMr. Dedalusに尋ねると、“Very. The lower register, for choice.”とMr. Dedalus

は答える (289)。彼は Bloom が City Arms Hotel に住んでいたころ、Molly は貸衣裳以外の商売もしていたと信じている。“Cyclops” の話者は Molly と Boylan のことを知っている。“Hoho begob, says I to myself, says I. That explains the milk in the cocoanut and the absence of hair on the animal’s chest. Blazes doing the tootle on the flute .... That’s the bucko that’ll organise her, take my tip” (319)。ダブリンの男たちはほとんどすべて Molly のことを性的ことばを用いて話す。彼らにとって Molly は、その歌声で男をおびきよせる whore/goddess である。

“Ithaca” 挿話に列記されている Molly の 25 人の恋人 (731) の矛盾を指摘するのは易しい<sup>5)</sup>。Bloom の一覧表はこの挿話特有の疑似科学的な客観性を装ってはいるが、彼の主観的妄想にすぎないのは、Molly の内的独白で熱い抱擁を交したと述べられている Stanley Gardner の名前が一覧表から脱落していることを指摘すれば十分である。Molly の独白には Bloom があげている 25 人のうち 18 人が登場するが、Boylan の外、Molly の初恋の中尉 Harry Mulvey を除けば、すべての男性に対しきっぱりと批判的な態度をとっている。Bloom の一覧表にあるイタリア生れの風琴奏きや中央郵便局前の靴磨きなどは身分が違いすぎる。また Boylan とのセックスが比較されているのが Bloom 一人であること、彼女の夜の瞑想が異常な興奮状態にあることから推しても、Bloom の留守に Molly のベットに実際に入ったのは Boylan が最初であるとする、多くの研究者の結論に異を唱えるものではない。

しかし、彼女の人生を色どる男性が Bloom の前に 1 人、後にせいぜい 3 人にすぎず、Bartell d’Arcy とは聖歌台の昇り口での一度の接吻、Mulvey と Gardner とは petting の域を出ていないからといって Molly が痩せた畑であることを意味しない。彼女に何人の恋人がいたか知りえないし、またそんなことはどうでもよいことだ。われわれが驚かなければならないのは、彼女の恋人たちが Molly の生命にいまなを深く広大な領域を占め、彼女を熱い思いにさ

5) Robert Martin Adams, *Surface and Symbol: The Consistency of James Joyce’s Ulysses* (New York: Oxford University Press, 1962), pp. 35-43  
 でこの問題は初めて本格的に取りあげられた。

せることである。彼女の欲望は15歳の初恋の時もいまも変りない、そして彼女にとって男はすべて he なのだからその欲望は無尽蔵である。Molly の心は別れたばかりの Boylan を離れ、Bloom の話に刺激されて若い詩人大学教授、Stephen Dedalus へと向っている。抱いて接吻してくれる人ならジプシーでも牧師でも、海からあがったばかりの船員でも殺人者でも、誰でもよい、場合によっては塑像を相手にしてもよいと思う。

of course a woman wants to be embraced 20 times a day almost to make her look young no matter by who so long as to be in love or loved by somebody if the fellow you want isnt there (777)

thered be some consolation for a woman like that lovely little statue he bought I could look at him all day long curly head and his shoulders his finger up for you to listen theres real beauty and poetry for you I often felt I wanted to kiss him all over also his lovely young cock there so simply I wouldnt mind taking him in my mouth (775-776)

Molly を豊饒の大地の象徴にするのはこの大らかな動物的欲望である。土の多産性と女性の多産性との間につながりを認めるのは、農耕社会の顕著な特徴の一つであり、生殖行為と農耕作業との同一視は、古代からの、しかも広く流布している直観である。多くの未開民族は、今日でもなお、大地を豊饒肥沃にするために、生殖器をかたどったまじないの護符を用いていることはよく知られている<sup>6)</sup>。A. Walton Litz は“Penelope”の特徴を暗示する“gynomorphic”という語が Joyce の *Ulysses* Notesheets の中にあるのに注目して、この挿話の形式は女性生殖器を模していると云っている<sup>7)</sup>。“Penelope”ではすべてが性的

6) ミルチャ・エリアーデ、『悪魔と両性具有』、宮治昭訳、エリアーデ著作集6(東京、せりか書房、1974)、pp. 134-174.

7) *The Arts of James Joyce: Method and Design in Ulysses and Finnegans Wake* (New York: Oxford University Press, 1963)、pp. 45-46.

傾向を帯びている。ここでは性愛のあらゆる形態と行為がきわめて率直、具体的に述べられる。性を“only nature”と考える Molly にとって顔を赫らめなければならないような性行為など一つもない。原始的な Molly は masturbation とか coitus interruptus, cunnilingus, manual stimulation などといった語を知らない。Penis も cunt も用いない。Vagina は医者と上流階級の婦人とが使う符牒である(770)。彼女にとって交接とは“that”であり、orgasm は“to let myself go with and come”である(754)。このような原始的遠曲語法は性を sophisticate するのではなく、具体化する。

Joyce が性を直視せずにいられないのは、Petrarch 以来のヨーロッパ文学の伝統に従って、彼が男女関係によって世界観を表現する作家だからである。男と女の絆は、彼と世界の絆だとする思想はごく一般的であり、Bloom でさえそれを詩に書いている。

*Dearer far than song or wine,  
You are mine. The world is mine. (678)*

不幸なのは、この小説が始まる時すでにもう Molly も世界も Bloom のものではないところにある。性の崩壊は世界の崩壊である。この挿話に性的倒錯が多いのはそのためだ。

Boylan とのことで Molly に罪意識がないわけではない。夕方、雷に眠りを醒された時、“the heavens were coming down about us to punish”と彼女は思う。しかし Molly は Stephen のようにいつまでも劣悪な感情に捉われていない。姦淫は世間が取り立てて非難するほどの悪事ではない、女がその性欲を充足するのは神の意志に従うことでもある、と Molly は考える。

its all his own fault if I am an adulteress as the thing in the gallery said O much about it if thats all the harm ever we did in this vale of tears God knows its not much doesnt everybody only they hide it I suppose thats what a woman is supposed to be there for or He wouldnt have made us the way He did so

attractive to men (780)

彼女は道徳や世間の目などに無頓着である。彼女は自己の欲望に忠実に生きるだけで善悪の彼岸に住むことができる。Frank Budgen は次のように云っている。“She dwells in a region where there are no incertitudes to torture the mind and no Agenbite of Inwit to lacerate the soul, where there are no regrets, no reproaches, no conscience and consequently no sin.”<sup>8)</sup>これほど排他的な世界に住む Molly Bloom は男性の anima であるか神話原型であって、具体的な個性をもった人物ではない。彼女の暗闇の瞑想は社会を無視しているだけでなく、それは永遠の現在なのであるから歴史をも超えている。

だがあくまでも事実固執する Mitchell Morse は、Molly の多産性は“sub-normal”であり、彼女は“Ithaca”の天界の問答者が云うように“big with seed”ではなく、ビールで脂肪ぶとりしているにすぎないと云う。Morse が直接攻撃しているのは豊饒の大地、生命の授与者、すべての人間の母という Molly の神話である。彼は“Since when does an earth-goddess sneer at fecundity and practice coitus interruptus?”と嘆いている<sup>9)</sup>。確かに Molly が血を分けた子供は二人だけで、その一人は11日の生命しかなかった。当時のアイルランドの平均出産率よりかなり低く、彼女は妊娠をうとましく思っているのは事実である。Rudy の死後、同じ悲しみをくり返さないために予防手段を講ずるのはわれわれの常識で是認できる。それを理由に彼女を不毛の大地と云うのは当を得ない。Robert Martin Adams が云っているように、Mrs. Purfoy が強いられているような“reproductive druge”は真の多産性を示すにふさわしい表徴ではない<sup>10)</sup>。Molly が死者を受け入れるのは新たな生命を授けるためである。独白の途中で、月にうながされ、彼女自身から鮮血が流れ出る。Molly は大地の豊饒性をそなえた女性である。

8) Budgen, p. 265.

9) “Molly Bloom Revisited,” *A James Joyce Miscellany, Second Series*, ed., Marvin Magalaner (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1959), pp. 139-150.

10) *Surface and Symbol*, p. 42.

Darcy O'Brien は Molly から大地の豊饒多産を剥ぎとるばかりでなく、彼女には優しさや思いやりなど全然ない、下品で金銭づくの “lower-middle-class adulteress” にすぎない。Molly の Milly に対する態度には、軽蔑といら立ちとが混り合った嫉妬があるだけで、いわゆる母性的なところは全然ないと云っている<sup>11)</sup>。これも一応認めざるをえない批判である。Molly は、夫が失意と困惑に満ちたダブリンの放浪を続ける間に、金持ちの男をエクルズ街の自宅に引き入れて、不倫の慰しみにふける姦婦である事実は曲げようがない。彼女は批判がましく、口うるさい利己的な女だ。普通われわれが母に期待する、慈雨のような愛情やひかえ目な態度は彼女に無縁である、Jung の anima がそうであるように。地母神は不思議な神である。彼女は自然であり、同時に「恐ろしい母」、 “Terrible Mother” である。「母のもとへ帰る」とは死を表わすことばでもある。Jung は「恐ろしい母」は死だけでなく自然の残酷面をもあらわし、しかも人間の苦悩に全く無関心であるところから *Pieta* に対応すると考えている。

Molly の反対者はだれでも彼女の怠惰、だらしなさを糾弾する。亭主に運ばせた朝食をベットで食べ、午後3時になっても着替を終えない彼女は、妻として弁解の余地がない。しかし、 “Im to be slooching around down in the kitchen to get his lordship his breakfast while hes rolled up like a mummy will I indeed did you ever see me running Id just like to see myself at it” (778) と Molly が云うように、自然が勤勉であったためしがあるろうか。勤勉であるべきは人間であって、自然はいつも怠惰で扱いにくい素材である。

Molly は Bloom の渴望とダブリンの男たちのエロチックな空想から生れ、夜の瞑想の中にだけ存在する。彼女は、多くの批評家が認めるように、Stephen や Bloom に比べ実在感の希薄な人物である。S. L Goldberg は、Molly にはいくつかの基本的で、因襲的な、女性的特徴があるだけで、個性的人格たらしめる “the odd, unpredictable moral contours” が完全に欠落していると云っ

11) *The Conscience of James Joyce* (Princeton: Princeton University Press, 1968), pp. 201-217.



ている<sup>12)</sup>。われわれが Molly に興味をいだくのは、彼女が “a thirty-shilling whore”<sup>13)</sup>だからではなく、彼女が “the indispensable countersign to Bloom’s passport to eternity”<sup>14)</sup>だからである。

## (2)

Molly はあらゆる豊饒神がそうであるように両性的である。「……大地（ガイア）はまず、自分と等しく、全地を覆うことのできるもの、星空（ウラノス）を生んだ。ウラノスは至福の神々に対して、永遠に堅固な座を奉獻することとなった」とヘシオドス『神統紀』にある。<sup>15)</sup>しかしいまはこのすべての創造力を蓄積する両性具有神の反対物の一致を例証するつもりはない。それは後段に譲って、ここで取りあげるのは、Mark Shechner が *Joyce in Nighttown* で、Phallic mother という心理学的範疇で総括した Molly の両面性と、それから派生するいくつかの問題である<sup>16)</sup>。

Bloom が10年と5ヶ月18日間、完全な交接，“ejaculation of semen within the natural female organ”(736)を断っている理由は、MollyによってRudyの死後は“we were never the same”(778)と述べられているだけで確かでない。もしかしたら真の理由は、Bloomが母を妻にしたために股座に受けた傷のせいかもしれない。BloomはMollyに対し常に情熱的ではあるが不能な子の役を演じている。“Ithaca”の最後でBloomが、Mollyの寝台で胎児のように丸くなって眠りにつく，“the childman weary, the manchild in the womb”(737)の絵は忘れ難いが、母の映像が一瞬にして妻に変わる。“Circe”挿話の超現実主義の演出も忘れられない。

12) S. L. Goldberg, *The Classical Temper: A Study of James Joyce’s Ulysses* (London: Chatto & Windus, 1961), p. 290.

13) O’Brien, p. 211.

14) From a letter to Budgen, end of February 1921. *Letters of James Joyce* 1: 160.

15) Hésiode, *Théogonie*, V. 126 sq. trad. P. Mazon.

16) Mark Shechner, *Joyce in Nighttown: A Psychoanalytic Inquiry into Ulysses* (Berkeley: University of California Press, 1974), pp. 195–226.

## ELLEN BLOOM

(...appears over the staircase banisters, a slanted candlestick in her hand and cries out in shrill alarm.) ... Sacred Heart of Mary, where were you at all, at all?

(Bloom, mumbling, his eyes downcast....)

A VOICE

(Sharply.) Poldy!

BLOOM

Who? (He ducks and wards off a blow clumsily.) At your service. (438-439)

妻を攻撃的な神格にする Bloom は実際には彼女を父の座にすえているのである。

Molly はこのような父親である母, Phallic mother であり, その両性的傾向は, 攻撃的で男勝りな振舞いとその多様な fetish に現われている。この男性の資性をもった逆説的な女性の典型は “Circe” 挿話の Bella/o Cohen であるが, それはまた Joyce の女性に共通に見られる基本的タイプでもある。彼女たちはすべて勝気で, わがままで, 残酷なところがあり, 母性的特徴と能力をそなえた成熟した女性である。彼女は Molly のように口やかましく, 支配的な場合もあるし, Gretta Conroy のように冷たくよそよそしいこともあり, また Bertha Rowan のようにどっちつかずの謎めいた態度を取ることもある。いずれにしろ彼女はかかあ天下の化身であって, 罰した褒美を与える全権を握っている。彼女は保護者であり, 懲戒人でもある。愛することも折檻することもできる。彼女は時として細く長い “Fair Tyrants” (751) の鞭を持つが, 普通彼女の男根的装飾品はある不思議な魔力をもつ物であり, 肉体の一部であったり, それを覆う衣服であったりする。

Bloom が根深い fetishist であることは *Ulysses* のいたるところで見ることができる。彼は女性の毛皮や衣服, 下着とくにズロースには, Joyce がそうであったように<sup>17)</sup>, 特別な執着をいだいている。彼は妻に最新流行のブルーマー

17) Zürich 時代の Joyce が人形のズロースを持ち歩いてたことが Budgen, pp. 319

や紫色の靴下留めを買い与える。“Nausikaa”挿話では、Bloomの関心はGerty自身よりも彼女の透明の靴下や下着にあるようだ。“A dream of wellfilled hose.... *Lingerie* does it” (368). Mollyの堅い乳頭をもつ円錐形の乳房は容易に彼女の賛美者たちの性的な過大評価となる。彼女はBoylanとBloomが彼女の足を凝視するのを嫌悪と快感とが混り合った目で見ている。

I dont like my foot so much still I made him spend once with my foot the night after Goodwins botchup of a concert so cold and windy it was well we had that rum in the house to mull and the fire wasnt black out when he asked to take off my stockings lying on the hearthrug in Lombard street well and another time it was my muddy boots hed like me to walk in all the horses dung I could find but of course hes not natural like the rest of the world (745)

ここには足だけでなく排泄物や汚物に対する強い嗜好がある。Freudは尿尿に関連する臭に感ずる快感がfetishの選択にもつ意味を指摘して、汚れた、悪臭をはなつ足だけが性の対象になると云っている<sup>18)</sup>。それはともかく、MollyがこのようなBloomの倒錯を受け入れ、奨励さえするのは、fetishはpenisの代理物であり、その偏愛は彼女の男性的権威に拝跪することを意味するからである。

Fetishismは去勢不安からの防衛である、というのが古典的なFreudの解釈である。したがってfetishistは肉体がそこなわれないことを確認できる条件下でなければ情熱的になれない。彼は自分のpenisを見、手で触れることができる時にのみorgasmをうる。妻の中ではクライマックスに達することができない。Penisが消えるのは去勢の視覚的模倣だからである。そのためBloomにとって夫婦生活とは妻の前でする自慰の域を出ない。自慰とは自らが加害者とな

-320に述べられている。JoyceのfetishismについてはShechner, pp. 66-70参照。  
18) ジークムント・フロイト、「性に関する三つの論文」、『性欲論』、懸田克躬訳、フロイト選集5(東京、教文社、昭和44年)、pp. 40-41.

って空想的性交を行なう、自虐行為である。

who is in your mind now tell me who are you thinking of who  
is it tell me his name who tell me who the German Emperor  
is it yes imagine Im him think of him can you feel him trying  
to make a whore of me what he never will he ought to give it  
up now at this age of his life simply ruination for any woman  
and no satisfaction in it pretending to like it till he comes and  
then finish it off myself anyway and it makes your lips pale  
(740)

Bloom は妻から肉体的に安全な距離を保ち、空想の中で彼女に激しい情熱を  
いだき続ける。この情熱は競争者が現われる時、またはその可能性がある時に  
だけ、現実的な力に変る。こうして彼は妻の愛ばかりでなく、妻の不貞にも依  
存することになる。

すでに承知の通り、Boylan-Molly-Bloom の関係はごく一般的な oedipus 状  
況のバリエーションである。母を演じる妻と子である夫、そして欠くべからざる  
裏切者の兄弟。*Ulysses* の愛情関係は、Stephen Dedalus が Shakespeare の私  
生活から導きだした理論で図式的に示されている。“Scylla and Charybdis” 挿  
話における Stephen の Shakespeare 論は、*Ulysses* のドラマの理論的中核と考  
えることができる。William M. Schute は *Joyce and Shakespeare* で、Shake-  
speare も Bloom も男勝りの女に “overborne” され、女兒が生れるので、余儀  
なく結婚した男たちであるとして、その類似点をあげている<sup>19)</sup>。両者とも恋愛  
で優位に立つ自信を失い、“Dark Ladies” の存在で無力化され、妻の二度目の  
出産後は性交を断ち、息子の死後、父と被相続者とを失った。二人とも妻を奪  
った精力絶倫の男に強くこだわりながら、正常な状態に復帰する努力をしない  
寝取られ男である。彼等は苦痛を噛みしめながら満足をうるために家に帰る。  
共に激しい情熱と近親相姦的傾向を持つ点でユダヤ人的である。

姦淫とは、Stephen が云うように、他の男に妻を与えることにより、その罪

19) William M. Schute, *Joyce and Shakespeare: A Study in the Meaning of Ulysses* (New Haven: Yale University Press, 1957), pp. 121-135.

に自らも加担しているがゆえに、原罪である (212)。姦淫を求める者は、父親の役割を果すべき欠くべからざる競争者と協力して、もともと母親に関連させていた愛の条件を妻の中に再構築するのである。この目的のために Boylan は慎重に選ばれている。彼は Molly の “hole” を埋める “big red brute of a thing” (742) 以外のいかなる人格も与えられていない。しかし、Bloom の幼兒的な理想は Molly の姦通によってはじめて実現するというのは、二人にとって破局的な試練である。Bloom は、深層の心理が裏返しにされる “Circe” の劇場で、Bella/o Cohen の姦淫の告発には耐えることができる。それは彼が定めた規則に従ってゲームをするようなものである。彼の理想主義の構図が危うく完成しかけるのは、Nymph による Platonic love の哀訴である。彼はその牧歌的な美に屈し立ち上がろうとする時、ズボンの後ろボタンが飛んでいつもの用心深い現実的な Bloom にもどる。

一方、Molly は彼女の Phallic mother の命じるまま、あの逆説的な保護者の攻撃を加えるだけだ。

*I'll put on my best shift and drawers let him have a good  
eyeful out of that to make his micky stand for him I'll let him  
know if thats what he wanted that his wife is fucked yes and  
damn well fucked too up to my neck nearly not by him 5 or 6  
times handrunning theres the mark of his spunk on the clean  
sheet I wouldnt bother to even iron it out that ought to satis-  
fy him if you dont believe me feel my belly unless I made him  
stand there and put him into me Ive a mind to tell him every  
scrap and make him do it in front of me serve him right (780)*

Bloom を情熱的にするには、彼にとって最も屈辱的な処罰を加えるより外に方法がないと思っている。彼女の意図は、彼女のことばほどあばずれていない。Boylan の桃と酒瓶が入った豪華な贈物より、Bloom の 8 本のけしの花が忘れられない Molly は、彼女の夫と同じ位い夢想家である。空想の中でエロチックな夢を紡ぐ Molly は、現実では一度の不貞に興奮する忠実な Penelope である。

そればかりでなく実際に夫を裏切った Molly は、空想の中で Bloom を守り、彼の復讐をするのである。彼女は Boylan を恋人に与えて下さったことを神に感謝する、次の密会が待ち遠しくてしかたがないと云うが、“Poldy has more spunk in him” (742) と Bloom の精力を認め、Boylan は礼儀知らずで、教養がないと退けてしまう。

no thats no way for him has he no manners nor no refinement  
nor no nothing in his nature slapping us behind like that on  
my bottom because I didn't call him Hugh the ignoramus that  
doesnt know poetry from a cabbage (776)

こうして John Henry Menton は “big stupo” に、Ben Dollard は “balmy ballocks” に、そして馬車の中で Molly を弄んだと云いふらす Lenehan は “that sponger” に貶められる。City Arms 時代の Bloom 家の事情を酒場の話題にして興じる Pisser Burke には、“you vomite a better face there was no love lost between us” (765) ということばが投げつけられる。“Ithaca” で Bloom の理性によって処理された Molly の求婚者たちは、彼女によってとどめを差されるのである。

われわれは大いそぎで Molly の役割を見てきた。Molly はとりわけ Phallic mother であり、幼児的崇拝の理想である。Boylan は彼女の肉体を取り、Bloom は主としてその上に纏うものを取る。彼女は姦婦であり、よき妻である。Bloom の裏切り者であり、彼の復讐者である。そしてなによりも Bloom がその永遠の旅のパスポートに必要な裏印である。しかしこれらの地位は彼女が努力して勝ち得たものではない。彼女はただ存在するだけで行動を禁じられている。彼女の心理はその皮膚と同じ厚さしかない。Shechner が云うように、Molly はその心理が内面から描かれている人物ではないのである<sup>20)</sup>。彼女は動物のように素朴な自己愛に従って自分に必要なものを手に入れるだけである。彼女は誰れよりも自分自身を愛している。

20) Shechner, p. 206.

I bet he never saw a better pair of thighs than that look how white they are the smoothest place is right there between this bit here how soft like a peach easy God I wouldnt mind being a man and get up on a lovely woman (770)

I suppose its because they were so plump and tempting in my short petticoat he couldnt resist they excite myself sometimes its well for men all the amount of pleasure they get off a womans body were so round and white for them always I wished I was one myself for a change just to try with that thing they have swelling upon you so hard and at the time so soft (776)

この無心の自己愛によって、男性でもある逆説的女性 Phallic mother は、あの創造神のように、あらゆる要素を自らの内に含みうるのだ。

### (3)

Joseph C. Voelker は、Joyce の女性観、とりわけ Molly Bloom の広大な可能性をひめる反対の一致、及び動物的な反知性主義が、Giordano Bruno の自然観にもとづくという興味深い立証を行っている。彼の論拠は 1903 年に、J. Lewis McIntyre の *Giordano Bruno* の書評を Joyce がダブリンの *Daily Express* に掲せていることにある<sup>21)</sup>。勿論、Bruno はニコラウス・クザーヌスの影響下にある。クザーヌスは神の本質は対立の一致 (coincidentia oppositorum) を最も妥当な定義と考えていた。両性具有のシンボルは、Ellade が云うように、久しい昔から対極的、敵対的原理の神における逆説的共存を意味したばかりでなく、「全体性」もしくは「絶対」とわれわれが呼んでいるものをも意味すべく用いられてきた。蛇（地下の闇と未顕現のシンボル）と鷲（太陽と光と顕現のシンボル）との結合は、図像や神話の中で、全体性の神秘あるいは宇宙的統一の神秘を表わしている。対極性と対立の一致の概念は、哲学的

21) Joseph C. Voelker, "Nature it is': The Influence of Giordano Bruno on James Joyce's Molly Bloom," *James Joyce Quarterly* 14 (Fall 1976), 39-48.

思弁のはじめから体系的に用いられてきたが、それらの概念を漠然と表わしたシンボルは、批判的反省の所産ではなく、存在的緊張の結果なのだ<sup>22)</sup>。すでに引用したヘシオドスによって伝えられた伝承によれば、「渾沌」(中性)から「暗黒」(中性)と「夜」(女性)が生まれた。「大地」は独力で星のちりばむ「天空」を産んだ。この単性生殖は両性具有を意味している。それはあらゆる力、それゆえに対立する対、例えば渾沌と形態、闇と光、潜勢と顕現、男と女などを包含している原初の全体性の神秘的表現である。

Molly の辻褃の合わない独白は中世の形而上学を経て、ギリシャ最古の神々へ通じている。われわれの直接的な体験、具体的、歴史的、人間存在においては、善と悪は対立し、人間は善を追求し、悪と戦わねばならない。永遠の中にあつて真なるものは、暗闇の中にあつて真とは限らない。世界は原始の統一の決裂によって出現した。Stephen は対立する矛盾に苦しめられ、Bloom は多義性の迷路をおぼつかない足どりで歩いているとしたら、Molly は矛盾などおかないに、むしろ気付かずに自分の水路を流れていく。彼女は常に自己の必要しか意識しない、それが本質的に自然の仮借ない論理であっても。彼女は生きるための理由を求めない。生きて存在するという彼女自身の貧欲な動物的衝動以外に存在理由を要しない。このような素朴な要求によって反対を結合し、矛盾を廃棄できるのであるから、彼女は完全である。人間の完全性とは裂け目なき統一のことである。

彼女自身「夜」の「渾沌」と「暗黒」である Molly は、矛盾を意識しない。Bloom はプランを立て計画する。彼女はなにも期待しない。彼女はあらゆる主題に瞬間的要求に従って瞬間的立場を取るだけだ。したがって彼女の内的独白の表面は、無数の対立的意見や気分がぶっかり合って独特な活力を漲らせている。彼女は Milly の行儀が悪いと腹を立てたかと思うと、すぐ気分を直して、自分だってあの年代は同じだったと理解あるところを示し、悪いのはすべて Bloom だと云う。Molly は女中の Mrs. Fleming が嫌いで小さな失敗にいち

22) ミルチャ・エリアーデ、『悪魔と両性具有』、宮治昭訳、エリアーデ著作集6 (東京、せりか書房、1974)、pp. 102-167.



いち小言をいうが、それらはすべて“of course shes old she cant help it”で帳消になる。彼女は自分の生理的要求にはすこぶる率直であるのに、兵士たちの露出趣味や男便所の汚穢は許すことができない。また、彼女自身をさらけだして“a few smutty words smellrump or lick my shit”とつぶやく Molly は、“O that awful deepdown torrent O and the sea the sea crimson sometimes like fire and the glorious sunsets and the figtrees in the Alameda gardens yes...” (783) と最も美しい叙情詩を歌うこともできる。次の例では男性に対する羨望と軽蔑、女性に対する賞賛と憎悪、夜の危険と安らかな静寂とが一気に語られている。

show them attention and they treat you like dirt I dont care  
 what anybody says itd be much better for the world to be  
 governed by the women in it you wouldnt see women going  
 and killing one another and slaughtering when do you ever  
 see women rolling around drunk like they do or gambling every  
 penny they have and losing it on horses yes because a woman  
 whatever she does she knows where to stop... I wonder why he  
 wouldnt stay the night I felt all the time it was somebody  
 strange he brought in instead of roving around the city meet-  
 ing God knows who nightwalkers and pickpockets his poor  
 mother wouldnt like that if she was alive ruining himself for  
 life perhaps still its a lovely hour so silent I used to love  
 coming home after dances the air of the night they have  
 friends they can talk to weve none either he wants what he  
 wont get or its some woman ready to stick her knife in you I  
 hate that in women no wonder they treat us that way they do  
 we are a dreadful lot of bitches I suppose its all the troubles  
 we have makes us so snappy Im not like that (778-779)

彼女の意見や気分が対立しているばかりでなく、彼女の発想法自体が対立的なのが次の例に見ることができる。

flowers of all sorts of shapes and smells and clours springing  
up even out of the ditches (781-782)

that was an exceptional man that common workman (748)

James Van Dyck Card は “‘Contradicting’: The Word for ‘Penelope’” で、このような対立的表現を収録しているが、Card はまた別の論文でこの挿話には up と down, in と out といった更に小単位の言語上の対立があることを例示している<sup>23)</sup>。

Card が立証しようとしているのは “Penelope” に見られる変化の統一であるが、Molly は絶えず変化しながら常に一定である。なぜなら彼女は自分のことしか考えないからだ。彼女の自己中心的傾向は性や流行に関するとき最も明らかである。Molly は Stephen を恋人にと思うとき、“I suppose hes 20 or more Im not too old for him if hes 23 or 24” (775) と Stephen の年齢を実際より多く勘定するが、母性的気分になると “I suppose he was as shy as a boy he being so young hardly 20” (779) に変る。Molly は次のコンサートのために “Ill change that lace on my black dress to show off my bubs” (763) と挑発的な衣裳計画を立てるが、同じことを Mrs. M’Coy がする場合は、“and her old green dress with the lowneck as she cant attract them any other way” (773) だと軽蔑する。Molly は性を “only nature” と考えているので、女性がブルマーをはいたり自転車に乗ったりするのは礼節に反するという Mrs. Riordan や司祭を、わからずやの頑固者だと非難する。“that old Bishop that spoke off the altar his long preach about womans higher functions about girls now riding the bicycle and wearing peak caps and the new woman bloomers God send him sense and me more money” (761)。一見、Molly は女性の性や服装について進歩的な自由思想をもっているように思える。しかしこれらの自由は Molly 一人に許される特権であって、女性全般に当てはまるとは考えて

23) James Van Dyck Card, “‘Contradicting’: The Word for ‘Penelope,’” *JJQ*, 11 (Fall 1973), 17-25; “The Ups and Downs, Ins and Outs of Molly Bloom: Patterns of Words in ‘Penelope,’” *JJQ*, 19 (Winter 1982), 127-139.

いない。同じことを他人がすると Mrs. M'Coy の場合のようにふしだらで無作法になる。Mr. Bloom のような男がいつも “those blazenfaced things on the bicycles with their skirts blowing up to their navels” (746) を見ている。Molly は Milly の不品行も黙っていられない。“riding Harry Devans bicycle at night its as well he sent her where she is she was just getting out of bounds wanting to go on the skatingrink and smoking their cigarettes” (766). これは中産階級の保守的な良識を表わしているように見える。しかし、Milly に対し Molly がいんでいるのは母親的な気づかいや、保護者的な感情ではなく、彼女の若さに対する嫉妬であり、判断基準は彼女のエゴ以外にない。このせまさが様々なこっけいな矛盾となって現われているのだ。彼女はライバルの歌手、Kathleen Kearney, “and her lot of squealers,” “lot of sparrow-farts” のことを考えて、“let them get a husband first thats fit to be looked at” だと云うが、その四行あとに “I could have been a prima donna only I married him” (763) とくやしがる。

このような Molly の矛盾、対立が発条となって、Adams が *Ulysses* のどの文体より “resilient and self-generating” だといった<sup>24)</sup>、“Penelope” の散文を回転させるのである。彼女はあらゆる要素を自分の周囲に集め、“bottom,” “yes,” “because,” “women” といった特別な語を様々な文脈でくり返ししながら、“the huge earthball” のようにゆっくりと着実に回転している。この挿話は永久性の表徴である8ケの “sentences” から成り、yes ではじまり yes で終るところから、循環的と呼ぶのが一番ふさわしい。Bloom が遅く帰宅して朝食を求めるのは病気ではないかと気づかう冒頭の部分は、“spinning Earth”<sup>25)</sup> の特徴がよく表われている。もともと長い文は、Mrs. Riordan と Bloom とに対するそれぞれ相立する意見が弾み車となって、従属節を加えるたびに前へ前へと進

24) Robert Martin Adams, *James Joyce: Common Sense and Beyond* (New York: Random House, 1966), p. 168.

25) Phillip F. Herring, ed., *Joyce's "Ulysses" Notesheets in the British Museum* (Charlottesville: University of North Carolaina Press, 1972), p. 515.

んでいく。

Yes because he never did a thing like that before as ask to get his breakfast in bed with a couple of eggs since the *City Arms* hotel when he used to be pretending to be laid up with a sick voice doing his highness to make himself interesting to that old faggot Mrs Riordan that he thought he had a great leg of and she never left us a farthing all for masses for herself and her soul greatest miser ever was actually afraid to lay out 4d for her methyated spirit telling me all her ailments she had too much old chat in her about politics and earthquakes and the end of the world let us have a bit of fun first God help the world if all the women were her sort down on bathingsuits and lownecks of course nobody wanted her to wear I suppose she was pious because no man would look at her twice I hope Ill never be like her a wonder she didnt want us to cover our faces but she was a welleducated woman certainly and her gabby talk about Mr Riordan here and Mr Riordan there I suppose he was glad to get shut of her and her dog smelling my fur and always edging to get up under my petticoats especially then still I like that in him polite to old women like that and waiters and beggars too hes not proud out of nothing but not always if ever he got anything really serious the matter with him its much better for them go into a hospital where everything is clean...(738)

はなばなしい文体上の実験を行った後に、Joyce は、句読点をすべて取り除くという単純ではあるが奇想天外な手段で、夜の増殖性と渾沌を45ページにわたって作り出した。Molly は *Finnegans Wake* のリヒュー河の神話的象徴である Anna Livia Plurable の前身である。彼女はその猛烈な、喜劇的な食欲で花も汚泥も、天も地も、すべてを飲み込み、押し流すばかりで、立停って反省したり、意味を限定したり、説明を加えたりするようなことはない。

矛盾した辻褄の合わないことを述べていく Molly は本質的に喜劇的であり、実際おかしいのであるが、彼女は笑いを知らない。喜劇には、対象からはなれて複眼的に観察し、微妙なずれを認知する俊敏な知性が必要である。Molly が具現しているのは創造に先立つ未分化の統一、始源の充溢であって、Stephen を引き裂き、Bloom を困惑におとしめる知性は彼女には無縁である。彼女は簡単な数学ができない、抽象概念を用いることができない、正しく文字を書くことができない (“your sad bereavement sympathy I always make that mistake and nephew with 2 double yous,” 758)。Bloom が聞きかじった多くの知的分野で、彼女が尊敬するのは生理学、というよりも “a lot of a mixed up things especially about the body and the insides” (743) だけである。政治ほど嫌いなものはない。自然の近くにいる Molly は動物の方が、人間よりましだと思っている。“those country gougers up in the City Arms intelligence they had a damn sight less than the bulls and cows” (758)。Molly が矛盾と相対が支配する世界を超えるのは、知的生命を持っていないからである。彼女は対立を超脱しようとか、個別的状況を捨象して形而上学的認識に到ろうなど考えない。彼女は自分の生存のみを考え、自分なりに感じる。そして周囲に反映する自分の姿を見るだけだ。Molly はわれわれすべてを支える反理性的な感覚を表わす、つまり人生がいかに荒涼と思えようとわれわれを生きし続ける肉体だ。

最も理解力のある Joyce 研究者の中にも Molly の動物的な反理性主義が受け入れられない人々がいる。Kenner は、*Ulysses* を “comic inferno” と考えているのだが、Molly の最後の有名な “yes I said yes I will Yes” (783) は “authority over this animal kingdom of the dead” だと云っている<sup>26)</sup>。“Penelope” には構造上の破綻があると考えている Goldberg は Molly の “Yes” は “No” とも読めるといっている<sup>27)</sup>。しかし二人とも立場はそれぞれ異なるが、Molly がある女性原理の象徴であることは否定していない。Bloom が靈魂の永遠性を表

26) Kenner, p. 262.

27) Goldberg, p. 299.

わし、Stephen が精神の永遠性を表わすとしたら、Molly は肉体の永遠性を表わす。彼女は女性であり自然であって、本質的に気まぐれで、一貫性より永続性を望み、絶えまない流れにつれて次から次へと形態を変える。彼女の態度は、表面上、非論理的に見えるが、自我の要求に完全に一致し、彼女には分裂がない。なぜなら宇宙のすべてが彼女のためにあり、太陽は彼女のために輝くと思っているからだ。“yes he said I was a flower of the mountain yes so we are flowers all a womans body yes that was one true thing he said in his life and the sun shines for you today yes that was why I liked him because I saw he understood or felt what a woman is and I knew I could always get round him” (782). Bloom が太陽であるとしたら、Molly は大地だ。すべての文明が築きあげられる基本となる素材だ。その母胎に死者が埋葬されるのは、死者がそこで休息し母なる大地の神聖性のおかげで、再び生命をうるためである。

Molly を一個の独立した人物と考えるのはこの小説における彼女の役割を誤解することになる。彼女が示す矛盾や対立は自然主義のレヴェルで解決できるものではない。彼女は女性原理である。対立が抗争することなく共存し、多様が神秘的統一の様相を形成する原初の女性によって例証される原理である。彼女の性は彼女を自然と一体化する。すべてを受けいれ、産ませ、実らせ、そしてすべてに “yes” という Molly は一切の生命のはじめにあり終りに存する大地の象徴である。